

《教育長メッセージ 第13号》

『登山』

私は、学生の頃から山登りを始めました。

子どもの頃から野山を駆け巡っていましたが、山登りを始めたいという気持ちはありませんでした。

勧誘されるままに、体験ということで、山梨県の三つ峠という山に行きました。そこは河口湖と富士吉田の街をはさんで、正面に富士山が広がる絶景の富士山ビューの山でした。



また、三つ峠には、ロッククライミングのゲレンデがあり、ザイルを付けられて、初めて、岩登りに挑戦しました。

すべては、その瞬間からでした。

手を放したり、足を滑らせたら落ちるという「生きてる感」は、それまで、いい加減にダラダラ生活してきた青年にとって、衝撃的でした。

私は、山登りに夢中になりました。

大学の講義を休み、一年の三分の一は、山に登っていました。親の仕送りは、テキストではなく山の道具に化けました。

四季を通じて、北、中央、南アルプス、ハヶ岳に入りました。多くの岩場に挑戦し、冬山の魅力に憑りつかれました。

本格的な登山の最後は、冬のハヶ岳でした。36歳の時だったと思います。後輩に誘われて、清里から入山し、天狗尾根を詰めて、赤岳に登る山行でした。暗くなって、赤岳の頂上付近で片方のアイゼンを落として、命からがら、頂上小屋に逃げ込みました。

それ以来、アルプスの山々には足を運んでいません。ピッケルや登山靴は、私の山登りと同じように、屋根裏部屋に眠っています。

近年の登山ブームの中、多くの人に誘われますが、どうも足が向きません。私にとっての山登りは、残念なことに、偏屈で、自分の一生懸命生きる証のようなこだわりがあり、心から山を楽しむという域に達していませんでした。

あと数年して、余裕ができたなら、楽しむために山に行ってみたくと思っています。

ありがたいことは、私の体の内側には、山々の時間ごとの絶景と仲間と過ごした貴重な記憶が残っているということです。

さて、みなさんの夢中になった青春の思い出はなんですか。そして、

どんな記憶が刻まれているのでしょうか。聞いてみたいものです。

次回は、『コミュニティスクール』について、私の考えを伝えてみたいと思います。